

# 中世久保泊城の攻防

橋 迫 照

(会員 佐伯市鶴岡町)

津久見湾の南側に位置し、佐伯湾と背中合わせの形で突き出た四浦半島の突端間元まもとから、三よ程入った所に観音崎のんざきという細長い岬があり、この岬と間元に抱かれた入江の中心に久保泊ほしほりという集落がある(地図参照)。古くから人が住んでいたといわれ、残された史料の数々に地名が見られる。

この久保泊の北側に接して乳首のような形をした小さな岬があり、山頂には城跡(砦か)が今も残っている。海抜はおよそ四十よでそれほど広くはない。

今から四百年の昔、この小さな城を囲んで大友・島津の両軍による壮絶な戦いが繰り広げられた。その時の様子は津久見市誌に詳しく書いてある。そこでこの時の合戦における両軍の攻防について、前記市誌から関係する部分を転載して紹介したい。

天正六年(一五七八)十月、大友宗麟はキリスト教国建設のため、重臣たちの反対を押し切って臼杵城を出航した後、日向国務志賀むしかに本陣をおき、対島津合戦を忘れたかのようにその建設にとりかかったのである。この第二回目の遠征に当たっては、総指揮者田原紹忍たわらじょうにんへの諸將の反発を招き、また最も頼りとなる南郡衆なんぐんしゅうの不可解な行動などにより、当然ともいえる大敗を喫し、天正十四年(一五六八)には薩摩軍の豊後侵入を許し、津久見合戦が起ころのである。

『大友興廢記』によると、鳩の浦には鳩兵部丞・同源介、久保泊には加島中務なかつたせ・同右馬助うまのすけ、深浦には加島三河守・同主殿介しゅのまのすけ、越智浦には紀主馬助しほのすけ・同九郎が拠を構えていたという。これらの諸士は、薩摩軍の侵入に対応するため、久保泊に城を構えて防戦体制を整えた。

十一月下旬、薩摩の密使が度々来航し、島津義久への内応を求めた。この誘いを断った鳩兵部丞らは、造船所のあった「どち河原」の入江に樽を浮かべ、城から鉄砲で撃つて見せるという示威行動に出た。重ねて、密使が来たら、物もいわせず討ち取ると待っていた所に、密使が扇をあげて矢留やどめを乞い、自分は島津家久の使者である

ことを告げてやって来た。これを加島三河守と鳩兵部丞が撃ち伏せてしまい、同乗の十余人は城兵が殺害し、首を刎ねてしまったので、以後密使の誘いは中止された。

十一月十三日、島津家久の下知を受けた薩摩勢は、兵船二百艘を連ね、「とち河原」入江に入港し、城を取り囲んだ。鉄砲による合戦は、朝六つ時より日中に及んだ。手負い戦死者を多く出した、薩摩軍は退却し休息した後、船板や竹を束ねたものなど、工夫した楯たてで身を隠しながら、再び攻めて来た。これを見た城兵は大筒を集め、火薬を調合して撃つたため、楯では防ぎようがなく死傷者が続出した。敵は再び境まかいという所に退却せざるを得なかった。

しばらくすると使者として光泉坊をいう山伏がやって来て、しばらくの休戦と、死者の引き取りを申し出て来た。城中には、この申し出には応ずべきではないとする強行論を唱える若者集団があったが、鳩兵部丞、加島三河守、紀主馬助・九郎らは、薩摩軍の申し出を断れば、夜を日について、攻めて来るであろう、昼は勝利を得たものの、夜戦では鉄砲の効果もあまり期待できない、合戦が長引けば、火薬も兵糧も底をついてしまうし、その

上多勢に無勢であるので、一旦は薩摩軍の申し出を受け入れて引き上げさせた方が得策である。その間に宗麟公に注進し、援軍と火薬の申請をすれば、あるいは堅固に持ちこたえられようと意見を述べた。

この意見は城兵全員の賛成を得るところとなり、光泉坊を大手前に呼び寄せ、城中からは鳩兵部丞が出て、申し出のあった死体引き取りの承諾を与えた。この死体はすべて境に塚を築いて納められた。この後、薩摩軍は境に陣を布き、暫く待機の姿勢を取っていた。

この時、城中では敵の大将と思われる者を鉄砲で撃つ者はいないかという声が起こった。その声に応じた加島左京進さきょうのしんが大将と思われる一人を撃ち取った。これに驚いた薩摩勢はようやく退却を始めた。その後、報告を受けた宗麟は後日の褒美を約束するとともに、再度の来襲に備えて、鉄砲二百挺と火薬・兵糧米を与えた。意気あがる城中とはうらはらに、薩摩の再来はなかった。

「豊後国志」海部郡古蹟の条によると、久保泊城は佐伯庄久保泊浦に存在するとしている。この地方には、鳩浦・窪浦・津久見・深浦の四つの浦があり、この地を本

貫とする諸士は、久保泊城に入り薩摩軍の侵入に備えた。

天正十四年(一五八六)島津義久はこの四浦地方を入手しようとして、数度にわたって密使を送り込んで誘ったが、当然これを断った。「椽河原」に入った密使の舟を見つけた浦人は、直ちに城中に報告した。城中から出た将兵は、すぐさま駆けつけ十数人の薩兵全部を殺害した。この後、二百艘の薩摩船団が来襲するが砲を放ってこれを撃退し、その将を捕らえたと述べている。

このほか、「大友家文書録」では、鳩浦に鳩兵部少輔源介が、久保浦には加島中務少輔・右馬助が、深浦には賀島三河守・主膳助が、越智浦には紀主馬助・九郎がおり、共に久保泊壘に入り、しばしば兵船を出し、日向から渡海して来る薩兵を進んで攻撃したとしている。これに対し薩摩軍も兵船を連ね、「楮河原」の入江に入港して久保泊壘を攻撃するが、壘兵はよく防戦し退却させた。宗麟は鉄砲玉薬を久保泊壘に遣わしたと述べている。

いずれ其内容をそのまま信じるには今一つ裏付け史料が不足していると思われるのが現状である。

豊後国志卷之五 海部郡の古蹟には

## 久保泊城

在 佐伯莊久保泊浦 此地 有四浦 曰鳩浦曰窪浦曰津久見曰深浦諸士為 一守此城 天正十四年島津義久欲 屬 己数遣使諭 之不從使者竊襲 之置 舟於椽河原 浦人知 之直殺 十数人 於是薩兵二百余艘俄来伐又放 砲悉敗 之遂獲 其將 とあり。

「大友興廢記」に記された地名などは割合に正確であるが、「豊後国志」には前記のように鳩浦・窪浦・津久見・深浦と書いてある。以前、四浦の地名発祥について書いた(佐伯史談)一七八号参照)時には、鳩浦・落の浦・蒲戸浦・福泊浦の四つで四浦と書いていた。

久保泊の城跡は四百年以上経った今でも頂上にはちよつとした広場があり、ここが武者溜りだったのであるかと推定できる場所もある。

登り口には空堀(掘切)の跡らしいものも見られるとい

う。また、突端部にはかなりの広さの洞窟もあり、これは食料や武器弾薬の貯蔵に用いたのかもしれない。この城跡から俯瞰すると、『大友興廢記』にいう境や椽河原、『大友家文書録』にいう楮河原(刀自ヶ浦)の入江は眼下に見える。だがこの物語りはやはり大友宗麟の直筆の感状か、なにか、事実を証明するものが発見出来て初めて日の目を見る城跡であろう。

山頂から加島左京進が、境に布陣する薩軍の大将と思われる者を撃ち取ったとあるが、直線距離にしても二百四、五十メートル以上はあり、たとえ高低差(約四十メートル)はあるにしても、そんな性能の良い鉄砲があったのだろうか。また、腕前の程も神業であったとは思われないのだが。



鳩浦越えの展望台から見た城跡

